

資料紹介 柳田国男関係資料について

加藤 隆志・水曜会

はじめに

緑区若柳の奥畑集落出身の鈴木重光（1887～1967・敬称略）は、青年団活動をはじめ、さまざまな面で地域の発展に力を尽くした地元の名士である。また、民俗学や郷土史の分野でも、大正7年（1918）夏に日本民俗学の創始者である柳田国男らの郷土会会員によって内郷村（旧相模湖町若柳及び寸沢嵐地区）で行われた、わが国における地域の共同調査のさきがけとされる民俗をはじめとした調査に際して、地元で対応した者の一人であり、内郷村調査以後においても大正13年（1924）に『相州内郷村話』を刊行するなど、津久井地域の民俗を中心に調査研究を進め、神奈川県民俗学や郷土史に大きな足跡を残している。

鈴木が収集したさまざまな資料を保管していたのが津久井郡郷土資料館（旧津久井郡四町が相模原市と合併後は津久井郷土資料室・注1）で、もちろんすべてが鈴木が収集ではないが、例えば、城山ダム（津久井湖）建造のために水没した地区を中心に収集された農具や漁具・生活用具などの民俗資料をはじめ、江戸時代からの古文書、明治以降の記録類や教科書、津久井地域を中心とした絵はがき、雑誌及び書籍、ポスター、新聞とそのスクラップ、チラシ・パンフレット、包装紙、手紙、マッチ箱などというように実に多岐にわたっており、津久井地域の歴史や文化だけでなく、当時の日本全体の生活や文化を知るための大変興味ある資料群である。しかし、これらの膨大な資料は、古文書や一部の絵はがき、雑誌・書籍、教科書など、相模原市に合併する以前の津久井町史編さん室が編さん事業に資するためにごく一部の資料の整理を行ってきたものの、多くが未整理の状態であった。そこで、こうした資料を整理することを目的として、博物館に市民の会である「水曜会」（注2）が平成23年（2011）1月に結成され、2017年12月現在で約40,000点の資料について整理や目録化を進めており、資料の存在を広く知らしめるために収蔵品展等も何回か開催している。

今回紹介するのは、これらの水曜会による資料整理の過程で明らかになった柳田国男に係わる資料である。前述のように大正7年に行われた内郷村の共同調査は、そ

の後の柳田における民俗学の形成に大きな意味を持ったことはたびたび指摘されており、郷土資料室が保管する内郷村調査に関する資料についても紹介されている（注3）。一方で、鈴木が『相州内郷村話』が柳田が関与した『炉辺叢書』の一冊として刊行されるなど、鈴木にとっても柳田との出会いはその後の学問や人生にとって大きな意味を持ち、内郷村調査以降も柳田と鈴木との交流は長く続いており（注4）、こうした両者の親密な交流を示す手紙などが新たに見つかったのである。これらの資料は、2017年7～9月にかけて実施した収蔵品展「江戸から大正の津久井の姿」において展示したが、本稿ではそれらについて具体的に紹介していく。

手紙類

従来、柳田から鈴木に当てた葉書は1通が確認されていたが、このほかに年賀状1通と葉書9通・手紙1通が確認された。このうち年賀状は、消印により昭和12年（1937）1月4日に柳田から鈴木宛てに出されたもので、印刷の「謹賀新年」とともに雪の中を門松が飾られた家に5名の男が向う様が描かれ、（土佐禰原の正月）と記されている。

前述のように葉書は全部で10通あり、このうち②昭和4年（1929）10月3日付けの1通はすでに小島環禮によって紹介されている（注5）。以下、順に年月日と概略について述べる。

① 昭和4年8月と想定されるもので、写真は書斎の前に柳田と子どもが2名写っている。鈴木は栗とともに焼いて乾燥させた鮎もよく送っていたようでその御礼とともに、昭和初年に加賀紫水の編集で創刊された土俗趣味社の雑誌である「土の香」も送られたことの謝辞となっており、以下の葉書にも「土の香」が散見される。

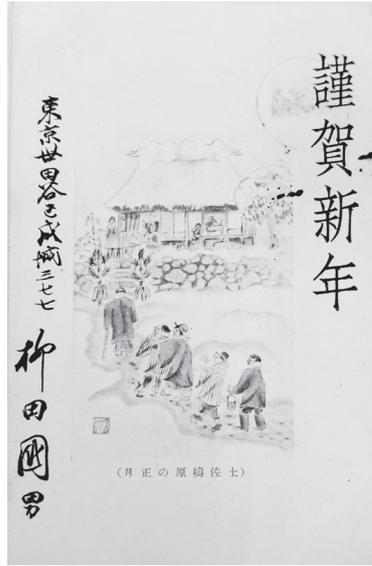
② 昭和4年10月3日付・鈴木から栗が送られたことの御礼とともに、子どもと石老山下の古跡を訪れる希望を述べており、次の③によると訪れるのは6日の予定であったようである。

③ 消印が今一つはっきりせず、投函された日時が不明だが、②と同じく神宮式年遷宮記念の切手が使われて

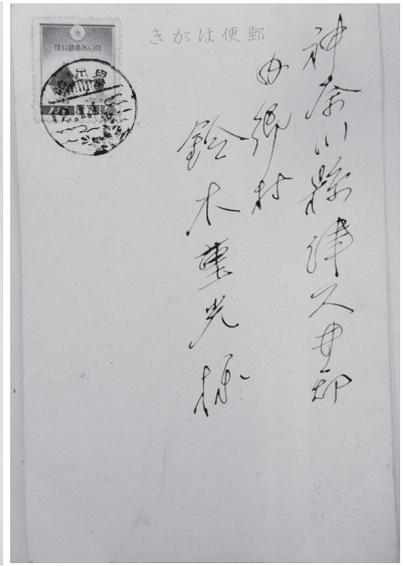


柳田国男の葉書①

大暑中何の御障りもなく悦しく存上候 本年も亦乾鮎御惠贈被下給ハリうれしく厚く御礼申上候 御紹介により尾張の「土の香」突然送り給ハリ是亦いふへからさるよろこひに候 秋ハ一度参上仕度存上候。蟹のことハ少し材料あれども今さがす時間無之候 その内二



(通信面)



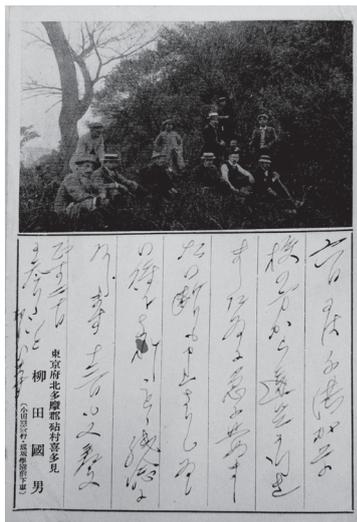
(宛名面)

柳田国男の年賀状



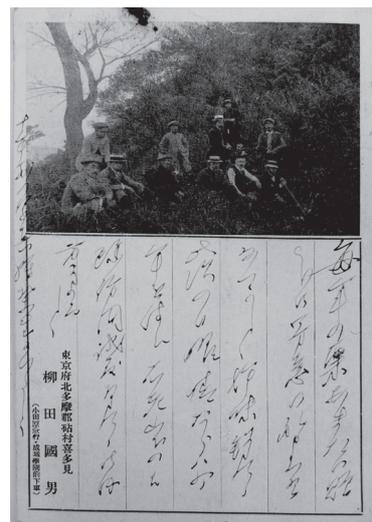
葉書④

土の香へは何か書く約束をいたしをり候 成るべく年内にハ送り度と存居候も段々前の仕事がおくれ心もとなく日限を定めかね候 十月二十九日



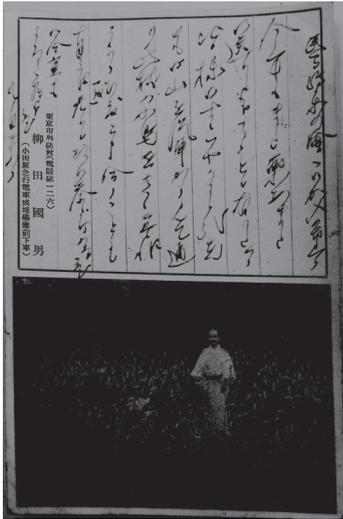
葉書③

六日には子供が学校の方から遠足に行きました 御断りも申上さりし為に御待下されしことと残念に存します 十三日も又差支です 二十日 におもひます



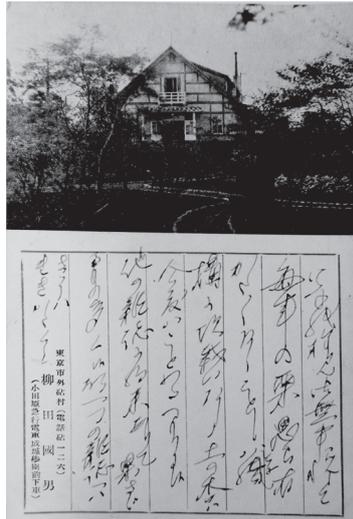
葉書②

毎年の栗あまた御贈被下御芳意御礼申上候 なつかしく拝味随一二候 此次の日曜晴ならハ少年を付に石老山下の古跡訪問試度存居候 御内方よろしく 十年前の写真絵葉書にいたし候



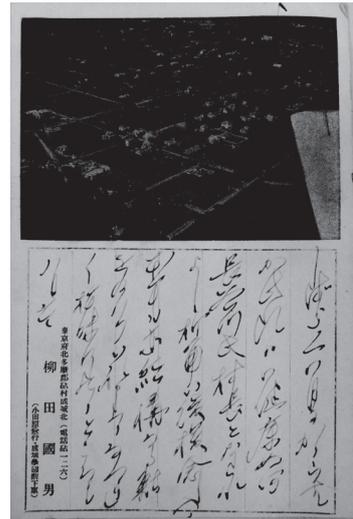
⑦

民間伝承の会へ御加入希上候
今年もまた栗あまた
御送り被下まことニ有かたく候
皆様御すこやかに候哉 先
日も御山を汽車から見て通
り此秋ハ小鳥をきとニ参乍
うかとひ度存候会ノことに候
十月には一度考へ候□□□□□□□□
御令室にも
よろしく御伝被下度候
九月二十八日



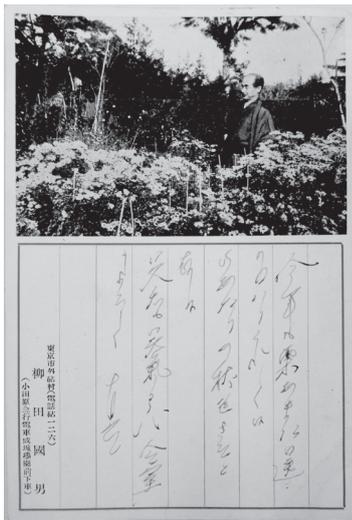
⑥

御手紙拝見御無事悦しく候
毎年の栗思召有
かたく存し候 ことしハことに結
構に頂戴いたし候 土の香ハ
今度ハことわるつもりに候
他の雑誌に約束ありて果さ
るもの多く候故一つの雑誌ハ
さうハ
書きかたく候



⑤

しばらく御目にかとらす候
か此頃ハ御健康如何
長谷川氏村長となられ「し」
よし折角御後援念し入候
本年も亦結構なる點
を給ハリ御礼申上候なつかし
く拝味仕居候ところニ候
八月六日



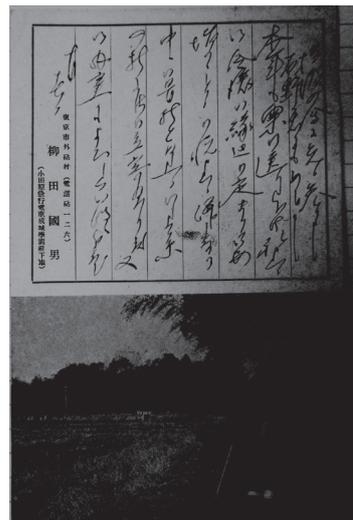
⑩

今年も栗あまた御送
り給ハリうれしく候
此あたりの秋色さそと
存し候
御父君も御元気に候哉令室
によるしく 十月六日



⑨

火曜日例の会に折あらハ
御出席給ハリ度候
御手紙拝誦仕候
栗又と御送給ハリ御礼申上候
此あたりの秋色ゆかし候 小生
本年ハ東奔西走ゆるくと
する日も少なく候 そのうちふらり
と遊びに参り度候 十月十三日



⑧

横浜の会に先日参り申し候
石野君にもあひ申し候
本年も栗御送り被下御礼申上候
御令嬢の縁組御定まり御安
堵のことニ御悦申上候 併しなから
中ニ御骨折と存し上候 御上京
の折には御立寄給ハリ度候 又
御内室にもよろしく御伝へ被下度候
十月十七日

いる。②による6日の訪問を急に取り止めたことの詫びと、次の20日の訪問の予定を記している。

④ 昭和4年10月30日付・①にある「土の香」に原稿を書く約束をしたが、いろいろと仕事が溜まって進まないことが記されている。

⑤ 昭和5年8月6日付・やはり焼き鮎を送られたことの御礼に加え、鈴木とともに内郷村調査に対して地元で尽力した長谷川一郎が村長に就任したことのお祝いを述べている(注6)。また、しばらく会っていないことを述べており、調査から数年が過ぎたこのころになると葉書等でのやり取りが中心になっていた。

⑥ 昭和8年10月3日付・いつもの栗の御礼であり、この後にも見るように鈴木は毎年柳田に栗を送っていた。「土の香」への原稿を断る旨も記されており、小島瓊禮は別の柳田からの葉書をもとに、加賀紫水が「土の香」への柳田の寄稿について鈴木に仲立ちを依頼したことを推測している(注7)。

⑦ 昭和10年9月28日付・例年の通り栗の御礼であるが、冒頭で民間伝承の会への入会を願っている。周知のとおり、昭和10年(1935)8月に行われた柳田の還暦を記念して開催された日本民俗学講習会において、全国規模の学会として民間伝承の会の設立と機関紙「民間伝承」の発行が決定しており、鈴木の加入を依頼したものである。それを受けて鈴木も早速入会しており、昭和10年11月20日発行の『民間伝承第3号』の中に、11月1日現在の新入会員紹介に見えている。柳田自らが民間伝承の会会員の獲得に熱心に取り組み、新たに創立した民俗学の普及に努めていたことが窺える。

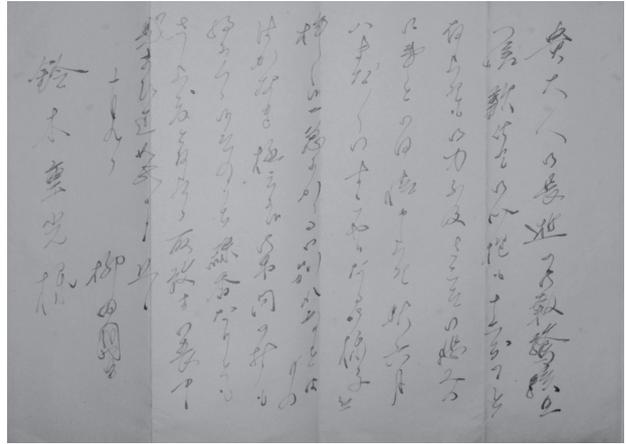
⑧ 昭和11年10月17日付・栗の御礼と鈴木の子の縁組が決まったことのお祝いの文言がある。この「横浜の会」は「横濱民間伝承の会」で、昭和11年10月に神奈川県民俗の調査研究を目的として柳田の勧めによってでき、10月11日の第1回例会に柳田が「神奈川県と民間伝承」として講演を行っている(注8)。

⑨ 昭和12年10月13日付・栗の御礼とともに多忙な日々を送っている様が述べられている(注9)。

⑩ 昭和15年10月6日付・栗のお礼だが、多忙のためこれまでの葉書に比べて簡単な内容になっている。

この⑩の葉書に引き続いて10月10日付で柳田から出された手紙には、封筒の裏に鈴木によるものと思われる「昭和十五年拾月拾壹日受付」の赤スタンプが押されている。内容は鈴木の子の父である亀作の死去に対するお悔やみであり、数日前の葉書で亀作について触れたことに対し、鈴木から死去したことを伝えられ、それを受けて柳田が手紙を出したと思われる。柳田の驚きとともに、

両者の深い交流が継続していたことを伺わせる文面となっている。



鈴木重光様

十月九日

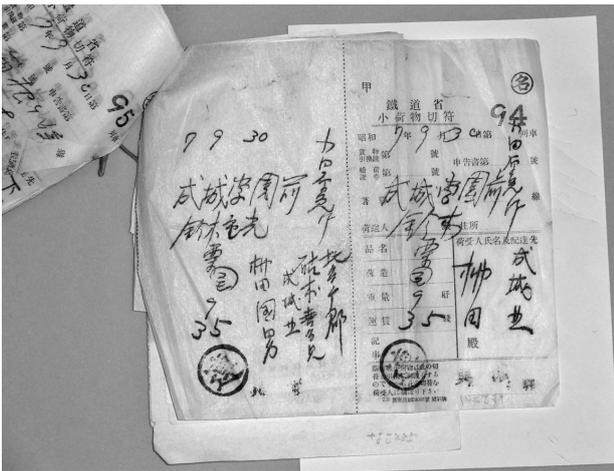
柳田國男

貴大人御長逝の御報驚駭且
つ嗟歎仕候 御介抱も十二分のこと
存上候も御力不及きこそ御悲みの
御事と御同情申上候 此六月
八まだく御すこやかなる御様子
拝し候二急にかゝる御別れありとは
はかなき極みに候 御弔問の折も
得にく候 そのうち線香なりとも
さし上度と存し居候 取敢す御喪中
御見まひ迄如此申し上候恐々

柳田国男のお悔やみ状

送り状

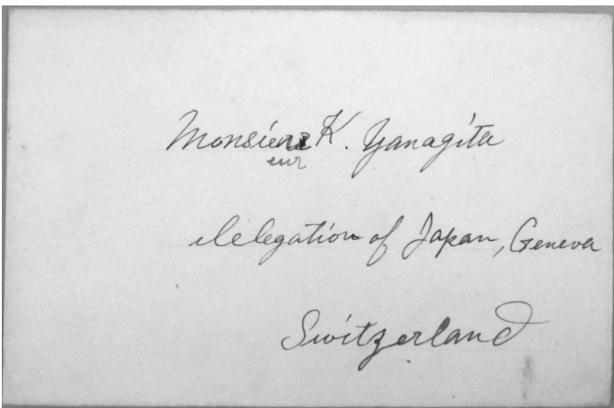
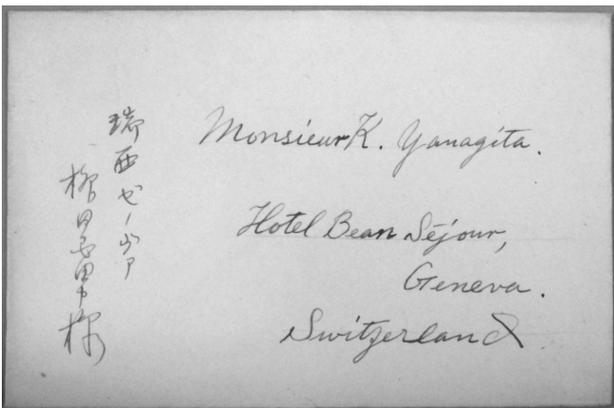
鈴木重光が集めたものは実に多様でさまざまなものがあるが、これは領収書等を束ねたものである。多くは郵便で送金した領収書や、地元の新聞取次店に支払った毎月の新聞代などで、昭和7年(1932)の領収印があるものが束ねられている。例えば、柳田ら民俗学研究者の投稿を多く掲載した『旅と伝説』(1928～1944)を刊行していた三元社(6月22日)や、柳田は関与していなかったがやはり折口信夫らの民俗学関係の論考を掲載した『民俗学』(1929～33)を刊行した民俗学会(7月9日)にも送金している。そして、この中に9月30日付けで、現在のJR中央線相模湖駅の前身である与瀬駅から小田原急行成城学園前駅を着駅として、柳田に栗9kgを送った鉄道省小荷物切符がある。先の葉書には昭和7年のものはないが、この季節の栗の送付は毎年恒例となっていた。



柳田国男の送り状

封筒

縦 9.6cm、横 14.7cm の封筒が 5 点あるうちの 1 点の表に縦書きで「瑞西ゼノヴァ 柳田国男様」及び「Monsieur K. Yanagita. Hotel Bean Sejour, Geneva, Switzerland」、もう 1 点に「Monsieur K. Yanagita delegation of Japan, Geneva Switzerland」と記されている。



洋行した柳田国男とのやり取りを示す封筒

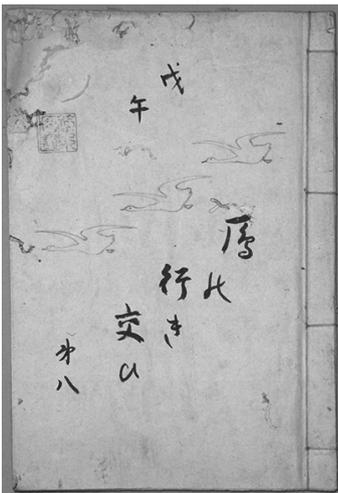
大正 10 年 (1921) から 12 年まで国際連盟委任統治委員会委員に就任した柳田は、10 年 5 月 9 日に横浜を出国し、アメリカやフランスを経て 7 月 11 日に国際連盟本部所在地のジュネーブに到着した。ジュネーブでは日本側の国際連盟関係者が多く滞在しているホテル、ポー・セジュールに投宿する (注 10)。この封筒には、柳田の名とともにジュネーブのホテル名が記されており、鈴木から柳田宛に手紙を出すための封筒かあて先をメモしたものと考えられる。実際、大正 11 年の柳田の日記には、9 月 27 日に角田恵重や鈴木重光等の故国の同学の者から手紙が来たことが記されており (注 11)、洋行した柳田とのやり取りを示す資料となる。

郵便発着記録

鈴木家 (鈴木重光だけではなく家族の分を含む) から発信あるいは着信した葉書や手紙・小包などを月日順に記した冊子で、通し番号・手紙等の種類・受信者または発信者 (住所氏名)・葉書の場合の画題と種類 (活版等)・摘要が書かれている。間に抜けている年もあるが、今のところ明治 44 年 (1911) から昭和 22 年 (1947) までの 28 冊及び、昭和 27 年と 28 年の合綴 (注 12)・32 年の 2 冊が見つかっており、特に初期の明治 44 年から大正 10 年 (1921) までの 11 冊 (明治 45 年と大正元年は合冊) は表紙に雁などの絵とともに「雁の行き交ひ」とあり、毎年の干支と第一～十一などの番号が記されている。

これらの冊子は明治～昭和初期のものは傷みが大きく、頁を開いただけで破れてしまうような状況であるものの、幸いなことに内郷村調査が行われた大正 7 年 (1918) から数年間は傷みも少なく、記載内容を確認することができる。表は大正 7 年 (1918) の第八から 10 年 (1921) の第十一の中で、内郷村調査関係及びその後の柳田とのやり取りを示す記事を抜き出したものである。当然ではあるが発信と着信は対応することが多いため、両者の関係が分かり易いように整理して示している。

特に内郷村調査が行われた大正 7 年は、いくつかの注目される内容が見られる。この調査の実施に際しては、柳田と地元受け入れの窓口となった長谷川一郎との間で事前に頻繁なやり取りがあり、柳田も数回内郷村を訪れている (注 13) が、この資料に柳田の名が現れるのは 6 月 27 日の着信が最初である。残念ながら摘要に記載がなくどのようなことが書かれていたのかは不明であるものの、この手紙を受けて鈴木は翌日に長谷川一郎に葉書を出して同日には長谷川から返書が届くなどしており、鈴木への元にも調査に対しての柳田からの協力依頼があったものと考えられる。次の 7 月 11 日前後も興味深く、まず



鈴木家郵便発着記録

10日に柳田から雑誌『郷土研究』12冊（注14）が送られ、それに対して鈴木は長谷川にお礼をすべきかを相談し、長谷川からの焼鮎を送れとの指示を受けて、柳田に五十尾を送って柳田から礼状が来るという流れになっている。鈴木としては長谷川の指示を受けて行動していることが分かるが、この後も実際の調査を挟んで柳田から『郷土研究』などの雑誌が鈴木宛に送られており、あるいは柳田は鈴木が民俗学的な方向に進むことを期待して自ら主宰した雑誌を送ったと考えられる。なお、調査に対して、地元で行った会議の通知文が7月24日に届いたことも見えている（注15）。

調査終了後には、9月21日に調査の主体であった郷土会での報告会が実施され、長谷川一郎とともに調査に対応した弟の董一とともにこの会に出席しているが、鈴木は参加していない。ただ、9月14日に柳田宛に不参加の連絡をしていることから、当然のように鈴木にも出席要請があったことが分かり、また、欠席にも係わらず長谷川と郷土会への土産物についてのやり取りも行っている（注16）。その後、注4に見るように10月13日には鈴木を訪ねて柳田が二女を連れてやってくるが、これに先立つ10月8日に長谷川は柳田を訪ねて本を貸したり少し話をしており（注17）、その際に内郷を訪れることを長谷川に伝え、さらに長谷川が鈴木に伝えて（10日）、14日に柳田来訪の様子を鈴木が長谷川に報告するというような状況にあったことが分かる。

翌大正8年以降には毎年年賀状のやり取りが行われている。ちなみにこの年に鈴木は柳田のほか、今和次郎・佐藤功一・中村留二・石黒忠篤・小田内通敏・牧口常三郎・中桐確太郎・正木助次郎などに年賀状を送り、全員ではないが年賀状を返されている。ただし、前述のように本稿で紹介する資料には昭和12年の柳田からの年賀状が含まれているものの、毎年の鈴木からの年賀状に対して柳

田の年賀状は記録されていない。そして、年賀状以外は品物の贈答が主となり、柳田からビスケットが来たり、鈴木から焼鮎や栗を送っている。先の小荷物切符のように、特に秋に栗を送るのは定例になっていたのであろう。鈴木が栗などを送っているのは調査者のうち柳田のみである。そんな中で鈴木は大正9年（1920）8月7日に焼鮎三十尾を送るが、8月2日から9月12日にかけて柳田は東北旅行に出かけており（注18）、おそらく柳田が留守で返事が遅れたことの詫びとともに、柳田の妻である孝がお礼の手紙を送付している。その際に鈴木は、小包の焼鮎に添えて「土俗誌について」とする葉書を出しており、柳田に対して質問のようなものを発したことも考えられるものの、柳田が旅行中でもあり、どのようなやり取りがなされたかについては不明である。

大正10年（1921年）は柳田が国際連盟の委任統治委員としてジュネーブに赴いた年で、その途中の6月20日に柳田はパリに着き、8月4日にパリから鈴木のもとに船便のためかなりの日数が掛かった便りが届く。また、5月9日に柳田が発した後ではあるが、翌10日には鈴木から旅の安全を祈ったと思われる葉書も出している。この間も柳田と鈴木は連絡を取り合っていたのであり、さらに柳田の留守宅に毎年恒例の栗を送り、柳田邸からはお礼のカステラが届くなど、変わらずの両者の親しい関係が継続していた。

おわりに

本稿では今年度の収藏品展で展示した資料を紹介してきたが、水曜会による整理はまだ途中であり、今後さらに新たな資料が見つかる可能性があるし、既整理のものであってもさらに内容を精査することで思わぬ記述に出会うことも充分ありうる。郵便発着記録は紙面の関係もあって柳田の關係に絞って紹介しており、実際にはそのほかの者との手紙等のやり取りも多数含まれていて、例えば、折口信夫とはすでに大正7年10月に雑誌『土俗と伝説』（注19）の贈呈を通じて交流しており、大正10年5月には内郷村調査に参加した小田内通敏の相模川下りの依頼を鈴木が承諾している。また、恩方村（現八王子市）の郷土史家で東京府立第二中学校（現都立立川高校）において同級だった菱山栄一など、鈴木の人的交流や生活状況などを知ることができ、さまざまな観点からの検討が期待される資料と言える。

水曜会の整理は8年目を迎え、先が見えない状況からようやく着地点が窺えるところまでやってきた。今後とも整理を進めて目録を整備していきながら資料内容について検討し、新たな知見を得ていきたい。

表 柳田国男に関する郵便発着記録一覧

大正7年

鈴木重光が発したものの					鈴木重光に来たもの				
番号	種類	月日	受信者	内容	番号	種類	月日	発信者	内容
141	手紙	6月28日	長谷川一郎	柳田氏の葉書	244	葉書	6月27日	柳田国男	(未記載)
144	手紙	6月29日	柳田国男	郷土口料の件、雑誌を下されたし	252	葉書	6月28日	長谷川一郎	柳田氏の件返書
149	手紙	7月11日	長谷川一郎	柳田氏にお礼すべきか	265	小包	7月10日	柳田国男	郷土研究十二冊
150	小包	7月11日	柳田国男	焼鮎五十五尾	266	手紙	7月11日	長谷川一郎	焼鮎を柳田氏に送れ
151	葉書	7月11日	柳田国男	焼鮎に添えて雑誌の礼	275	葉書	7月17日	柳田国男	鮎の礼
					286	通知状	7月24日	押田未知郎 長谷川一郎	柳田氏28日来る
162	葉書	8月5日	柳田国男	杜鵑研究の礼	297	小包	8月3日	柳田国男	杜鵑研究一部
166	葉書	8月12日	柳田国男	郷土研究の礼	305	小包	8月12日	柳田国男	郷土研究二十一冊
178	葉書	8月30日	柳田国男	返書、郵券のお礼	324	手紙	8月29日	柳田国男	先の礼、□二円郵券封入
184	葉書	9月5日	柳田国男	焼鮎四十一尾、鮎に添えて		葉書	9月8日	柳田国男	年魚の礼、第一回地名会
188	葉書	9月9日	柳田国男	第一回地名会列席の件 郷土研究四号通口八日夜附					郷土研究欠号の件
193	葉書	9月14日	柳田国男	郷土会に列席不能	344	小包	9月16日	柳田国男	郷土研究三冊
197	手紙	9月17日	長谷川一郎	郷土会の土産物の件その他	345	手紙	9月16日	長谷川一郎	郷土会への土産物の件
198	葉書	9月17日	柳田国男	雑誌夫(ママ)郵券の礼					
202	手紙	9月30日	長谷川一郎	雑誌の件柳田氏に頼む					
212	手紙	10月11日	長谷川一郎	柳田氏来遊の件	373	手紙	10月10日	長谷川一郎	柳田氏来遊
214	手紙	10月14日	長谷川一郎	柳田氏可来なる					
257	葉書	11月24日	柳田国男	旅行便り					

大正8年

鈴木重光が発したものの					鈴木重光に来たもの				
番号	種類	月日	受信者	内容	番号	種類	月日	発信者	内容
1	葉書	1月1日	柳田国男	年賀状 ※他に調査参加者多数					※調査参加者からの年賀状多数
73	葉書	1月7日	柳田国男	ビスケット等のお礼	62	小包	1月6日	柳田国男	状箱二ヶ、ビスケット一缶、 乾海苔一束(五帖)、送料十六銭
157	小包	6月18日	柳田国男	焼鮎47尾	260	葉書	6月26日	柳田国男	鮎のお礼
158	葉書	6月18日	柳田国男	焼鮎に添えて					
212	葉書	10月2日	柳田国男	栗実五升送る	275	葉書	10月5日	柳田国男	栗実のお礼

大正9年

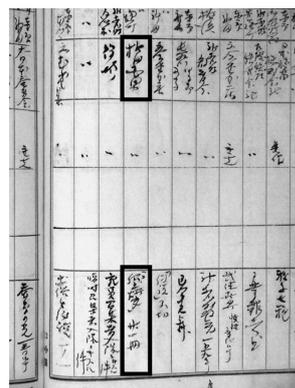
鈴木重光が発したものの					鈴木重光に来たもの				
番号	種類	月日	受信者	内容	番号	種類	月日	発信者	内容
39	葉書	1月1日	柳田国男	年賀状 ※他に調査参加者多数					※調査参加者からの年賀状多数
207	小包	8月7日	柳田国男	焼鮎30尾	355	葉書	8月15日	柳田 孝	鮎のお礼、主人留守
208	葉書	8月7日	柳田国男	鮎に添えて(土俗誌について)					
238	葉書	9月28日	柳田国男	栗実に添えて	416	葉書	9月30日	柳田国男	栗実のお礼
298	葉書	12月28日	柳田国男	小包の礼	544	葉書	12月27日	柳田国男	風月堂栗饅頭一箱送料二十四銭

大正10年

鈴木重光が発したものの					鈴木重光に来たもの				
番号	種類	月日	受信者	内容	番号	種類	月日	発信者	内容
44	葉書	1月1日	柳田国男	年賀状 ※他に調査参加者多数					※調査参加者からの年賀状
170	葉書	5月10日	柳田国男	祝御口行	373	葉書	8月4日	柳田国男	パリ・イーストステーションから、 旅先便り
298	葉書	10月1日	柳田国男	鉄道便にて栗実送る	453	小包	10月6日	柳田国男宅	栗実のお礼
314	葉書	10月24日	柳田国男	カステラのお礼	473	小包	10月23日	柳田国男宅	風月堂カステラ一箱送料二十四銭

昭和28年

鈴木重光が発したものの					鈴木重光に来たもの				
番号	種類	月日	受信者	内容	番号	種類	月日	発信者	内容
295	葉書	6月16日	柳田国男	日本の社会お礼	451	葉書	6月14日	柳田国男	社会科教科書贈呈
					452		6月15日	実業之日本社	社会科教科書九冊



写真左
大正7年に鈴木から送った手紙類のリスト

写真右
中央左寄りに柳田の名前(白枠上)と雑誌『郷土研究』
21冊(白枠下)が送られてきたことが見えている。

注

(1) 津久井郷土資料室は、昭和27年(1952)に県の蚕業取締所として建築された建物を利用し、同46年(1971)に津久井郡郷土資料館として開設された。建設後60年以上を経過して、建物の老朽化もあって平成26年度末で一般公開を休止し、その後、建物は解体された。収蔵されていた資料は当館で保管している。

(2) 2018年1月現在で活動日数は延べ217回となっている。現在は加わっていない方を含め、水曜会の会員は以下のとおりである(五十音順・敬称略)。

今井良子 岩竹信夫 遠藤朝子 大野みどり
柿澤富士子 上平幸子 川村耕一郎 草薙 熙

木村文夫 草間廣子 小出 秀 佐々木康賢 進藤芳和高橋彦雄 田部洋之 玉井 章 田巻アイ子 時津絹代 古川啓子 水田高之 目黒絹子 横須賀浩子

(3) 鈴木が作成したと思われる、内郷村調査の状況を知らせるいくつかの新聞記事を切り抜いてスクラップブックに貼ったものが残されており、『相模湖町史民俗篇』(小川直之「第八章郷土会と内郷調査—フィールドワークのさきがけ—」相模湖町史編さん委員会編 相模原市刊 2007年)に紹介されている。また、小島環禮は、やはり郷土資料室旧蔵資料の中から、郷土会調査の受け入れのために村役場で開催された会議通知や調査参加者名簿(実際には訪れなかった者もあり、参加者には赤丸印が記されている)、柳田から鈴木への葉書(葉書②)などを紹介している(「柳田國男の「地方の研究」時代—明治四十二年の愛川村訪問から大正七年の内郷村調査へ—」『民俗学研究所紀要』第31集 成城大学民俗学研究所 2007年)。

(4) 例えば、内郷村調査終了後の10月13日に柳田は二女を連れて鈴木の家へ赴き、鈴木が不在にも係わらず(その後帰宅)、昼食を食べて栗を拾っている(「大正七年日記」『定本柳田國男集 別巻第4』筑摩書房 1971年)。

(5) 小島環禮「柳田國男の「地方の研究」時代—明治四十二年の愛川村訪問から大正七年の内郷村調査へ—」103～104頁。なお、これらの葉書類や手紙は水曜会の会員が読解したが、実際にはなかなか判読が難しいものが多数あったのも確かである。そのため、本稿では水曜会での読みに対して小島環禮先生に添削していただいたものを掲載した。

(6) 長谷川は教育者として内郷小学校長等を歴任した後、昭和4～13年まで内郷村長を務めた。

(7) 注(5)と同じ。87～88頁

(8) 柳田の講演内容は、『歴史と郷土第12号』(神奈川県歴史研究会 1937)に掲載され、同号には「横濱民間伝承の概況」も載せられている。

(9) 本文中の「火曜日の例の会」は昭和12年(1937)1月から始められた「日本民俗学講座」と思われる(『柳田國男伝』柳田國男研究会編 三一書房刊 1988年 601～603頁)。

(10) 『柳田國男伝』 柳田國男研究会編 三一書房刊 1988年 601～603頁

(11) 「瑞西日記」(『定本柳田國男集第3巻』筑摩書房 1968年、281頁)。ただし、柳田はこの年の9月には引越して、手紙が来た当時はミルモン街六番地の二階家に住んでいたようである。それでもホテル・ポー・セジュールには夕食などで訪れていた。

(12) ここでは大正期のものだけを紹介したが、昭和28年(1953)の記録では、6月14日に当時柳田らが熱心に取り組んでいた社会科教科書を贈呈する旨の手紙、15日には『日本の社会』9冊が出版元の実業之日本社から届き、16日に鈴木からお礼の葉書を送ったことが見えている。ただし、当年に柳田が登場するのはこの記載のみである。

(13) 『相模湖町史民俗篇』 相模湖町史編さん委員会編 相模原市刊 2007年 424頁。

(14) 『郷土研究』は大正2年(1913)3月に創刊。日本での本格的な民俗学研究の出発点となった月刊誌で1917年3月に休刊した。当初は柳田と神話学者の高木敏雄との共同編集であったがすぐに柳田の単独編集となり、柳田はさまざまな名前を用いながら多くの論考を執筆している。

(15) 通知文の発送は7月23日付け、会議は28日に実施。注(3)に記したように、小島環禮「柳田國男の「地方の研究」時代—明治四十二年の愛川村訪問から大正七年の内郷村調査へ—」に、この通知の全文が紹介されている。

(16) 9月8日に柳田からの葉書には「第一回地名会」なる文言があり、翌9日には鈴木から出席の件と称して返信している。9月8日は柳田が三越の流行会で内郷村調査に関する講演を行った日であり、一方で21日の郷土会での報告会の出席勧誘とも考えられるが詳しい点については不明である。なお、21日の報告会では、長谷川は調査の際にも食べた「例の饅頭」(小麦粉の酒饅頭)を持参したようであるが、これだけであったかどうかは不明である(『相模湖町史民俗篇』435頁)。

(17) 「大正七年日記」(『定本柳田國男集 別巻第4』筑摩書房 1971年 311頁)

(18) 『別冊』柳田國男伝年譜』柳田國男研究会編 三一書房刊 1988年 25～26頁

(19) 『土俗と伝説』は折口信夫によって大正7年(1918)8月に刊行されたが、翌年にわずか四号で廃刊となり短命に終わっている。